

- 西牟婁地方は、ウメを核としたカンキツとの複合経営が主であるが、近年、温暖化や秋季以降の長雨の影響を受けやすく、これらの気象条件等に対応した栽培技術の普及による安定生産が地域の課題。
- 農業水産振興課では、JA紀南や試験研究機関と連携し、ウメ「南高」の摘心栽培推進による収量の安定や、温州ミカン新品種「YN26」の導入推進に取り組んだ。
- その結果、「南高」の摘心栽培導入面積および「YN26」の栽培面積が増加するとともに、マニュアル作成等をつうじて栽培技術の普及が図れた。

具体的な成果

1. ウメ「南高」の摘心栽培推進による着果安定

収量の安定を実証するとともに、電動バリカンを用いて摘心作業の省力化を実現
導入面積 (H29→R2) **2.5ha → 8.6ha**



2. ウメ「古城」着果安定対策の検討・実証

- ① 対策実証園の1樹当たり収量 慣行樹と比べ1.04倍に増加
- ② 受粉樹の選抜 「橙高」と「八郎」が有望であることが判明

3. ウメ「橙高」の導入推進及び加工品開発

- ① 早期成園化技術の実証 10a当たり収量 (H29→R2) **70kg → 478kg (6年生)**
- ② 新たな加工品開発
 - ・ 関係機関と加工品を試作 1種類
 - ・ 梅酒、梅干しの加工原料として販売

4. 温州ミカン「YN26」導入推進

- ① 導入面積 (H28→R1) **9.7ha → 18ha**
- ② ブランド果実* 出荷割合 (糖度10以上、酸1.0未満) (H29→R2) **30% → 31.8%**



普及指導員の活動

平成30年

- 摘心作業講習会 (4か所)
摘心栽培導入面積 5ha
- 「古城」、「橙高」栽培実証園の設置
- 「YN26」栽培実証園の設置と研修会
栽培面積 10.7ha

令和元年

- 摘心作業講習会 (4か所)
摘心栽培導入面積 8ha
- 「古城」、「橙高」栽培実証園の設置
- 「YN26」栽培実証園の設置と研修会
栽培面積 12ha

令和2年

- 摘心作業、剪定講習会 (4か所)
摘心栽培導入面積 8.6ha
- 「古城」、「橙高」栽培実証園の設置
- 「YN26」栽培実証園の設置と研修会
栽培面積 18ha
高品質栽培マニュアルの作成

普及指導員だからできたこと

- ・ JAや試験研究機関と連携して、栽培実証園を設置、研修会を開催することにより、新技術・新品種を、スムーズに生産現場に定着させることができた
- ・ 日頃から連携している、各地域の先進農業者の圃場で実証することにより、生産者や他地域への波及効果が得られた

気象条件等に対応した果樹産地の振興

活動期間：平成30～令和2年度

1. 取組の背景

西牟婁地域は、ウメを核としたカンキツとの複合経営が主であるが、近年、温暖化や秋季以降の長雨の影響を受けやすく、これらの気象条件等に対応した栽培技術の普及による安定生産が課題となっている。

このため、JA 紀南や試験研究機関と連携し、ウメでは「南高」の摘心栽培推進による収量の安定、「古城」の安定生産技術の現地実証、新品種「橙高」の導入に向けた技術支援を行うことにより、「南高」の摘心栽培導入面積を10ha、「古城」実証園の1樹当たり収量を1.5倍増及び有望受粉品種の選抜、「橙高」実証園の収量600kg/10aを目指す。カンキツでは温州ミカンの新品種「YN26」実証園にて研修会を実施するとともに、栽培マニュアルを活用し栽培面積を18haに増やす。また、ブランド果実「紀のゆらら」（糖度10以上、酸1.0未満）の出荷割合50%を目指し、高品質栽培マニュアルを作成する。

2. 活動内容（詳細）

(1) ウメ

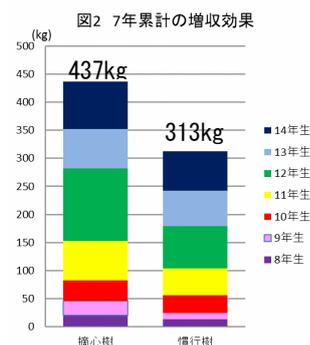
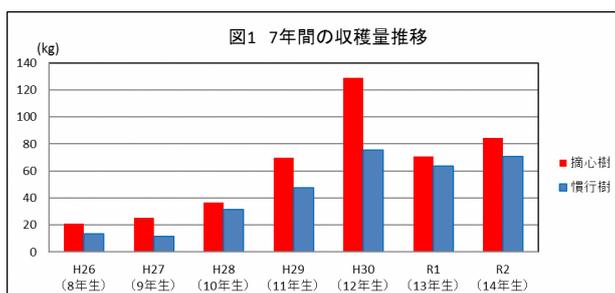
ア 「南高」の摘心栽培推進による着果安定

「南高」の摘心栽培は、「5月中下旬の2回目処理が農繁期で実施できない」との意見があり、大幅な面積拡大には至っていない。そこで、4月下旬以降に実証園他3カ所で摘心講習会を実施し、3カ年続けて充電式電動バリカンを用いて摘心処理が省力的に行える

ことを紹介した。生産者及びJA 紀南営農指導員が参加し、実際にバリカンを使って体験した。令和2年産のウメは近年にない不作であったためか、摘心講習会への参加者が以前より増え、生産者の関心の高さが伺えた。また、実証園での収量や徒長枝発生本数の調査結果についてJA 紀南生産販売委員会連絡協議会で報告し、処理の有効性を周知した（図1, 2）。



「南高」摘心処理講習会



イ 「古城」 着果安定対策の検討及び実証

「古城」の着果安定対策を現地で検討するため、人工授粉、受粉樹の高接ぎによる品種選定、早期摘果処理が収量に及ぼす影響をうめ研究所と連携して調査した。調査で得られた結果を基に、栽培指針をうめ研究所が主体となって作成し、「古城」生産者に配布した。また、田辺市新庄町に栽培指針で紹介された技術の展示園を設けるとともに、受粉品種に「橙高」の高接ぎを行い着果安定対策の普及に努めた。

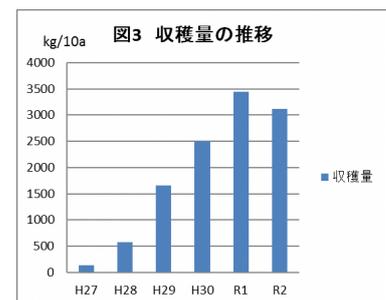
ウ 「橙高」の導入推進及び加工品開発

「橙高」の早期成園化を目指して、主幹形仕立ての密植栽培による現地実証園(48本/4a)において、新梢管理、収穫調査、せんだい研修会を実施した。生産者、JA紀南及びうめ研究所職員が参加し、生育状況を確認しながら樹容積の拡大に努めた。果実の特徴を活かした新たな加工品開発では、うめ研究所及び地元食品加工会社と連携してマヨネーズ風ドレッシングの試作を行ったが、商品化には至らなかった。うめ研究所が工業技術センターの協力を得て製造したピューレを田辺市とみなべ町内の飲食店7店舗に提供し、ドレッシングやドリンクを試作した。

(2) カンキツ

ア 「YN26」 導入推進

「YN26」実証園において、収穫調査、せんだい研修会を実施するとともに、品質調査結果を踏まえながら栽培マニュアルを活用して高品質栽培に取り組んだ。収穫調査結果についてJA紀南生産販売委員会連絡協議会で報告し、生産者に「YN26」の導入を呼びかけた(図3)。3カ年の取り組み結果をまとめた高品質栽培マニュアルを作成した。



3. 具体的な成果(詳細)

(1) ウメ

ア 「南高」の摘心栽培推進による着果安定

「南高」の摘心栽培は、新たに摘心に取り組む生産者や取組面積を増やす生産者があり、導入面積は8.6haに増えた。

イ 「古城」着果安定対策の検討及び実証

「古城」実証園の1樹当たり収量は、慣行樹と比べ1.04倍に増えた。収量は年による変動があり、最も差が大きかったのは令和元年産で慣行樹と比べ1.34倍であった。受粉樹の開花時期や「古城」の着果率を調査した結果、受粉樹には「橙高」と「八郎」が有望であることが判明した。

ウ 「橙高」の導入推進及び加工品開発

「橙高」実証園では早期成園化に向け着実に前進しており、現在の樹齢は6年生で、園全体の収穫量は昨年の1.35倍の191.5kgであった。1樹当たりの平均収量

は 3.6kg で、10a 換算では約 480kg であった。収穫した果実は JA 紀南を通じて販売し、大手梅酒メーカーが梅酒に加工して消費者から好評を得ている。また、漬物加工会社には梅干しの加工原料として販売した。

(2) カンキツ

ア 「YN26」導入推進

「YN26」の栽培面積は、平成 31 年苗木販売分の面積換算で 13.2ha に拡大している。「紀のゆらら」の出荷割合は 31.8%と伸び悩んだ。要因は 7 月の長雨の影響により品質が低下（糖低・酸低）したことと、着果量が少なく着果ストレスが十分にかからなかったためと推察される。実証園の果実品質は、周辺地域（上富田町内）や選果場の平均と同程度であった。

4. 農家等からの評価・コメント（上富田町 M氏）

「YN26」は樹勢が強くて作りやすいが、着色が遅いため 1~2 分着色で収穫する。このため他の極早生品種より見劣りしてしまう。令和 2 年産は生理落果が多く着果量が少なかったため、大玉果の規格外品が多かった。梅雨明け直後のマルチや適期かん水に努めたおかげで、出荷果実に占める「紀のゆらら」の割合は 3 割と昨年よりは高かった。「紀のゆらら」の販売単価は他の極早生品種に比べ高く、収益性を高めるためより一層高品質栽培に取り組み、地域一体となってレベルアップを図りたい。

5. 普及指導員のコメント（西牟婁振興局農業水産振興課・主査・前田起男）

ウメを取り巻く状況は、本活動開始前から大きく変化し、「南高」の梅干し用途向けを中心に需要が高く、単価も高水準で推移している。このため、「南高」の安定生産に向けた摘心処理技術の普及や自家和合性の新たな受粉品種の導入などをより一層進める必要がある。

「YN26」は、栽培実証園での品質・収量調査によるデータ収集、技術研修会の開催や展示効果等により徐々に面積は増えつつある。実証園は 7~8 年生樹で樹勢が強く、着果量を安定させることで本来の果実品質の良さが発揮されると思われるので、園主や JA 営農指導員とともに着果安定対策と高品質栽培の指導を継続していく。

6. 現状・今後の展開等

ウメでは、「南高」摘心処理の実施面積は徐々に増加しており、引き続き摘心処理と剪定講習会を開催し、安定生産技術を粘り強く普及させていく。「古城」の安定生産に向けて栽培指針を活用し、早期摘果や親和性受粉品種の高接ぎ等の技術を普及させていく。「橙高」はうめ研究所や JA 紀南と引き続き連携し、新たな加工品の商品化に向けて検討をしていく。

カンキツでは、JA 紀南と連携して「YN26」高品質栽培マニュアルを個別指導や栽培研修会で活用し、「紀のゆらら」の出荷割合を高める。他の極早生品種より収益性が高いことを周知することで改植を推進し、栽培面積の拡大を図る。